第３部パネル　分科会47

現場視察を有効に行うには、どんな工夫をすればよいか

提言

現場で思いと主体性・多様性を学び、仲間と意欲を得て、生活支援コーディネーターとしてのモヤモヤを払拭し、助け合い活動創出へチャレンジ！

登壇者

【進行役】

山本　純子氏	（特非）福祉NPO支援ネット北海道代表理事
西村　有里氏	芽室町第１層ＳＣ
佐藤　潤一氏	（社福）埼玉県社会福祉協議会地域連携課
宮城　智広氏	鶴ヶ島市第１層ＳＣ
稲葉　ゆり子氏	（特非）たすけあい遠州代表理事
松井　杏奈氏	御前崎市第１層ＳＣ
寺井　正治氏	（特非）ニッポン・アクティブライフ・クラブ副会長
羽根　武志氏	藤井寺市第１層ＳＣ
岡山　隆二氏	もちつ・もたれつ・まくネット代表
大竹野　佑介氏	南大隅町第１層ＳＣ

議事要旨　山本 純子氏

分科会47は、５つの地域でそれぞれ現場視察を企画したさわやかインストラクターと参加した生活支援コーディネーター（以下ＳＣという）が地域ごとにチームになって両方の視点から発表を行うという形式で、気候風土も地域事情も違う５パターンの実践がひとつの場で披露されるという内容。それぞれの現場視察の様子が、２人の発表によって徐々に姿を現し、発表後には５つの異なる形が浮かび上がっている。それらに共通するワードや表現があるのか。進行役としては共通項を探すという作業を提言への足がかりにしたいと考えた。

共通項①は肌感覚。「肌で感じる」「体感する」「生の声を聞く」「感覚的につかむ」など、現場でのみ得られる感覚を表現する言葉がどの発表者からも発せられ、参加者にそのときの現場の雰囲気を伝えていた。そしてその感じてつかんだものとは何だったのか。それは、視察先での活動者・利用者の「思い」。この思いを直接受け取ることができるのが現場視察の第一の効果といえる。

共通項②は主体性と多様性。「団地の集会室」「テナントビルの１Ｆ」「古民家」など場も様々。食の提供、体操、趣味の集まり、助け合いサービスなど活動も多岐にわたり、時間帯・曜日などもそれぞれ異なる。参加者は多世代で出入り自由。活動形態に捉われることなく自由に楽しく企画している。それらの主体性・多様性を実感したＳＣは少なからず衝撃を受けたと語っていた。

共通項③はＳＣ同士の関係づくり。バスの中などの移動時間中、宿泊を伴う場合はさらに交流が深まり、自然に仲間が出来ていた。各自治体が生活支援体制整備事業に取り組んでから比較的早い時期だったこともあり、ＳＣになったばかりで、何から手をつけたらいいのか、生活支援とは何かなど、ＳＣ特有のモヤモヤした心境を現場と仲間が払拭してくれた。この効果については企画側想定外のインパクトであった。

共通項④はやる気スイッチが入ること。具体的なイメージをつかみ仲間と語り合うことで、「よーし、やってみよう！」という意欲が湧いてくる。現場視察を経て地域に戻ったＳＣが活動創出に向けて何らかのアクションを起こしていた。現場視察がＳＣの次の一歩への原動力となっていることは確かだといえる。これらの共通項をまとめたものが本分科会の提言となった。

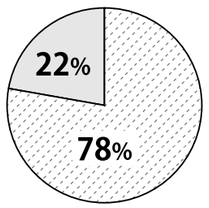
提言『現場で思いと主体性・多様性を学び、仲間と意欲を得て、生活支援コーディネーターとしてのモヤモヤを払拭し、助け合い活動創出へチャレンジ！』

このような効果的な現場視察を行うには、①多様な活動がある場を視察先に、②活動者の思い、具体的な活動のプロセスを語ってもらう、③参加者の意見交換・交流をプログラムに入れる。

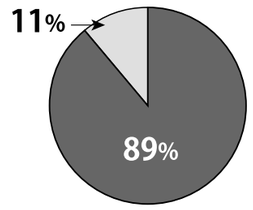
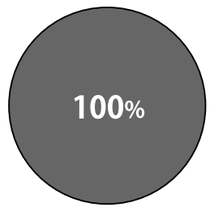
この３つを本分科会テーマの「工夫」としてあげておきたい。

アンケートの結果　参加者概数：30名　回答者数：23名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方